

## 第6章

### つくば会議から全国会議へ

---

## 第6章 つくば会議から全国会議へ

～ 『コーディネータネットワークつくば会議』 発起人 江原 秀敏 ～

コーディネータつくば会議に至る背景には何本かの伏線がありますが、時を得ていたことが大きいことは事実です。つくば会議が開催された平成 15 年という年は、政府の施策のうえでも産学官連携促進の第 2 ステージを模索していた時期であり、国立大学独法化前夜でもあって激動でした。

“つくば会議から全国へ” というコーディネータ大会スローガンの「全国」は平成 16 年 1 月に別府で開催されることが決まっているのですが、この全国コーディネータ会議が提唱されたのは、平成 15 年 2 月の大分県産学官交流大会においてでした。九州経済産業局は平成 14 年末に、九州における産学官推進の課題調査を三菱総研に依頼しており、次の 3 点に課題点を集約していました。これは、結果として全国共通の課題となりました。

- 1．出会いの場の不足
- 2．コーディネータの量質共の不足
- 3．意識改革の不足

この中でも、コーディネータの不足は全国の産学官連携促進の場で大きな課題となり、小規模でのコーディネータ会議が随所で開催されていました。私はこの大分大会にパネリストで参加していましたが、最後にパネリストに振られた提案事項として、「由布院での全国コーディネータ会議」を提唱しました。基調講演を終了して最前列で聞いておられたキャンパスクリエートの安田社長が大きくなずかれたのを記憶しております。大きなニーズがあるなと直感したのもその時です。

コーディネータの不足という課題は、産学官連携を進める上における現場のニーズを大きく先取りしていたのです。連携とは橋を架けることなのですから、その仕事の直接の請負人はコーディネータなのです。しかし、いろいろな仕事の場で意見交換をしてみますと、コーディネータの仕事とはどのような職務権限で、どのような方策で、どこまでやるのかに関して十分な合意がなされているとは思えませんでした。

私の提案は、コーディネータの研修は何年もかけてだらだらとやるのではなく、短期間に、1 年、2 年で集中してコーディネータのスキルをレベルアップしたらいいというものでした。全国の所謂コーディネータ現役はもちろん、就任希望の人材も集めて 1 泊 2 日ぐらいの研修を年に 3,4 回実施して、共通のスキルをもたせたらいいというものです。

安田さんは、「あの提案はいいよ。東大 TLO の CASTI もどこかでやろうと提案していたけど、開催する場所が悪かったなあ。由布院はいいよ、俺も入れてよ！なんだったら俺が CASTI に言ってやろうか？」というような具合でした。

これに続き、6 月に京都で開催された内閣府主催の第 2 回産学官連携促進会議がこの企画に拍車をか

けました。茨城県商工労働部長の滝本氏から「なにかありませんか？」と声をかけられました。よい施策提案がないか、ということです。それで、やはり、「産学官連携コーディネータ大会なんかどうですか？つくばのような場ではぴったりですよ。縦割り組織の中で、コーディネータは横の情報もほしいけど、機会が少ないというのが実態でしょうから」と申し上げました。「いいね、それ！」ということで、前後がありますが今度はつくばでの開催が決まったのです。滝本部長からは（独）経済産業研究所のDND（デジタル・ニューディール）事務局長の出口氏を尋ねるように言われました。

並行して、京都会議後の初夏、大分大学に行った折、工学部長や地域共同研究センター長、そして、大分全国大会の仕掛け人となった滝田 VBL 施設長等々の間で、「お互い、梯子を外すなよ！」という意気込みで、初期は開催時期を平成 15 年 9 月から 11 月に絞って全国大会を開催する予定でございました。

8 月初め、つくば会議の共同発起人の上原さんと一緒に出口事務局長を虎ノ門の経産省別館に訪ねました。『産学連携という野辺に咲く花の周辺をぶんぶん飛んで、受粉の役割を蜂のように担うのがコーディネータの仕事です』と私がロマンチックなことを言ったらしく、『その説は明快です。ビジネスのイメージがグーンと膨らみます。産学連携、大学発ベンチャーといっても全国にいる 1000 人近いコーディネータとしっかり連携し、その地域地域にコミットしていく、DNDはその全体をコーディネートしてはどうでしょうと熱い。』と出口氏の主宰するメールマガジンで紹介されました。このようにして、つくば会議のスポンサーが決まりました。

その後全国中小企業団体中央会などへ出向き、コーディネータサミットなどに関する過去の資料を拝見しましたが、大変参考になりました。これらの他団体の実績資料は、つくば会議に継承されました。ここに改めて御礼を申し上げる次第です。

10 月 14 日のつくば会議は学園都市内のネットワークを先ず目指していましたが、ふたを開けてみると、1 都 20 県から 150 人のコーディネータ関係者の参加という盛況振りでした。この様子を、次回全国大会を担う大分の関係者にご覧いただき、たたき台として持ち帰っていただきました。

大分全国大会はもともと、6 月の京都での産学官連携推進会議を受けて、各地方ブロックごとに展開する産学官連携促進大会の全九州版を大分県が担ったものですが、申し述べました経緯で大分大学 VBL が率先して全国産学官連携コーディネータ会議の事務局役を買って出られたのです。

その後紆余曲折がありましたが、最終的に大分大学がその大会の中の一翼を担う形で開催する運びとなったものです。そのため、全体の産学官連携シンポジウム事務局は九州経済産業局の中に置かれ、全国産学官連携コーディネータ会議の事務局は大分大学 V B L のなかに置かれるようになったのです。関東・東京周辺のパネリストの選定と折衝は私と上原が担当しました。

初めに申し上げましたように、大分全国大会への流れは、時流に乗ったといえます。今、産学官連携推進という時、この流れがどこに向かおうとしているのかを見極めなければなりません。全国大会にお招きしているパネリストの皆様方は、確実に日本型モデルの一翼を担っている方たちです。

大分全国大会終了後、相互連絡と情報交流のツールとして、コーディネータ・ネットワークメールマガジンが全国大会でのパネリストを主要なネットパネリストとしてスタートします。ご期待ください。つくばからスタートして、大分という南方に飛び火して花咲こうとしているコーディネータのネットワークが、産学官連携をどのように引っ張ってゆくか、楽しみにしています。